

## 西行『残集』をめぐる

はじめに

『残集』は連歌十四句を含めて全三十二首から成る小さな歌集である。『聞書集』に続く家集とされ、成立時期も近接し、編纂には共に西行自身の関与が認められる。後述する消息文からすると、これらのことは今のところ疑問の余地はなさそうである。だが、かつて藤平春男氏は『残集』巻頭消息から『聞書集』と『残集』の關係性に疑問を示し、「聞書集の方は文字通り聞くに従って書き付けた雑然たる内容だが、残集は全て遁世者との交友によっての作を相手の詠ともども記るしてあって、詠作の時期からも作品の性質上も、割合まとまりのある小歌集である」と述べた。現在では『残集』と『聞書集』の關係そのものが疑問視されることはなくなったが、確かに『聞書集』と『残集』は、単純な正統の關係にはないように見

える。

高柳 祐子

最近、最晩年であるとされてきた『聞書集』が、文治元年（一一八五）頃伊勢で成ったことが宇津木言行氏によって論証された。<sup>2)</sup>『聞書集』が収める最も新しい歌は木曾義仲の死（元暦元年（一一八四））を歌ったもの（二二七）、あるいは伊勢において上西門院兵衛の死を耳にした際の歌（二二九）で、これらの歌は末尾近くに見られる。『聞書集』はその時点での最新作を含めて編まれたと言えよう。『聞書集』は『山家集』の最終増補後の成立にかかっているのであるから、その後には詠まれた歌やそこに漏れた歌を纏めて一集とするのは極めて自然な成り行きであろう。実際、『山家心中集』や『御裳濯河歌合』『宮河歌合』などの秀歌撰の類は別として、西行がいくつもの家集を持つ意味は漠然とそのように理解されてきたようにも思う。だが、『聞書集』の後を承けるはずの『残集』は、出家前の

ものを含め、若い時期の詠歌がその半分を占める。所収歌の詠歌年次では、『聞書集』の方が新しいのである。『残集』には、晩年、あるいは『聞書集』編纂以後であると判断できる歌は一首もないと言つてよい。『聞書集』と『残集』の成立の間隔が短いと考えれば、これは矛盾とは言えないかもしれない。だが、『残集』を『聞書集』の続編とするにはやはり多少の躊躇を感じるのである。

『残集』に収められる若き日の詠草は、なぜ『聞書集』編纂時には撰に漏れてしまったのだろうか。続編を作るのではなく、『聞書集』に入れるという選択はなぜとられなかったか。『聞書集』と『残集』の編纂時期が近接するならば尚更である。それとも『聞書集』に入れるほどではないが、それなりの愛着のある歌を集めた、謂わば二軍の集が『残集』なのか。『聞書集』の続編としての『残集』の性格をどう見極めるか、結局成立の問題もそこに帰って行くであろう。本稿は、『残集』の作品世界を見通すことを通じ、そこから同集の成立事情についての推測を試みるものである。

本論に入る前に、諸本について簡単に触れておく。『残集』は、宮内庁書陵部蔵の二本と冷泉家時雨亭文庫本が伝わっている。早くから紹介された書陵部の二本は共に近世の書写で、両者には小異があつて別の系統と見られてきた。函号五〇一・一六八本は靈元天皇の外題を持ち、時雨亭本の忠実な模写である。一方、函号五〇一・一七一本も時雨亭本と照らし合わせると、巻頭消息部分は時雨亭本

の臨模であり、字配り、字体ともかなり似せている。また、本文に「虫」とある部分が時雨亭本の虫損箇所と一致し、異同箇所も単純な誤写や虫損により誤読を生じたものなど、ほぼ例外なく時雨亭本を書写したと見なしてよい。書陵部蔵の二本は共に時雨亭本を親本とする本であり、別系統の伝本が存在した可能性は現状では認めがたい。時雨亭本は定家筆と見られる打ち付け書きの外題をもつ、定家手沢本と見られ、書写年代も鎌倉時代初期を下ることはない。当面は時雨亭本が最古にして唯一の『残集』の祖であるとするのが穏当であろう。本稿でも時雨亭本を基本に考えていく。なお、時雨亭本『残集』の本文は天理図書館蔵定家手沢本『聞書集』の本文の筆と一致し、表紙の紋様、定家筆による打ち付け書きの外題「聞書集〈西行上人の〉」を持つなど、『残集』と体裁上の共通点も多い。内容的に密接な関わりを持つ両者が同時期に同所で書写されていたことは、両者が原本である可能性を高めるものであると思われる。

一

『残集』は西行のその他の家集である『山家集』『聞書集』と同様、「聞書」という体裁をとるが、そのあり方は他の集とは異なっている。『聞書集』の場合、扉に「聞きつけむにしたがひて書くべし」の書き付けがあり、それが西行による偽装であるか否かは別の問題として、少なくとも近侍者による口述筆記であることが宣言さ

れる。これは、『山家集』の二三五〇番歌「あふとみし」の後にある一文「この歌ども、やまぎとなる人のかたるにしたがひて、かきたるなり、さればひがことどもや、むかしいまのこと、とりあつめたれば、とき、をりふしたがひたることども」とも通底すると言えよう。『残集』にはその類の文言は見られない。その代わり、『残集』における聞書の明徴は、ひとえに空仁とのやりとりの後の一文「申つゞくべくもなきことなれども、空仁がいうなりしことをおもひいで、とぞ」といふ、筆録者が語り手の言をうける言葉「とぞ」に見ることが出来る。このようにはっきりと筆録者がその存在を示し、語り手が語っている内容、すなわち過去の出来事に対して現在の視点から批評を述べるのも『山家集』や『聞書集』には見られない『残集』独自のものである。

では、『残集』において過去と現在はどうリンクするのか、またはしないのか。以下に空仁とのやり取りを全て掲出する。連歌六句、歌一首と長文の詞書から成り、『残集』のハイライトとも言うべき箇所である。西行伝でも取り上げられることが多い。

いまだよのがれざりけるそのかみ、西住ぐしてほうりんに  
まいりたりけるに、空仁法師経おぼゆとて、あんじちにこ  
もりたりけるに、ものがたり申てかへりけるに、ふねのわ  
たりのところへ空仁まできてなごりをしみけるに、いかに  
のくだりけるを見て 空仁

はやくいかだはここにきにけり (二二)

うすらかなるかきのころもきて、かく申てたちたりける、  
いうにおぼえけり

おほゐがはかみにゐせきやなりつる

かくてさしはなれてわたりけるに、ゆへあるこゑのかれた  
るやうなるにて、大智徳勇健、化度無量衆よみいだしたり  
ける、いとたうとくあはれなり

おほゐがはふねにのりえてわたるかな (二三)

西住つけり

ながれにさを、さすこちして

心におもふことありて、かくつけゝるなるべし

なごりはなれがたくて、さしかへして、まつのしたにおり

ゐておもひのべけるに

おほゐがは君がなごりのしたはれてゐせきのなみのそでにか、  
れる (二四)

かく申しつゝ、さしはなれてかへりけるに、「いつまでこもり  
たるべきぞ」と申ければ、「おもひさだめたることもはべら  
ず、ほかへまかることもや」と申ける、あはれにおぼえて  
いつか又めぐりあふべきりのわのあらしのやまを君しいでな  
ば (二五)

かへりごと申さむとおもひけめども、ゐせきのせきにか、

りてくだりにければ、ほいなくおほえはべりけん

京よりてばこにときれうをいれて、中<sub>に</sub>ふみをこめてあん  
じちにさしをかせたりける、かへりごとを連歌にしてつか  
はしたりける 空仁

むすびこめたるふみとこそみれ

(二六)

このかへりごと、法りんへまいりける人につけてさしをか  
せける

さと、よむことをば人にきかれじと

西行は出家前、西住と共に法輪寺に空仁を尋ねたという。その時の  
空仁の「優」で「ゆゑある」立ち居振る舞いにいたく感じ入り、空  
仁の言葉や行為一つ一つに「あはれ」を覚えるのである。そして京  
へ帰った西行は法輪の空仁の許へ「齋料を入れて中に文をこめ」た  
手箱を送る。その返事は連歌であったというが、そこで二人は恋愛  
めかした思わせぶりなやりとりを交わす。このような軽口を既に憧  
憬の目で見つけていた空仁と交わしたことは、西行にとって忘れ得  
ない記憶の一つであった。問題の文はこれに続く。

申つゞくべくもなきことなれども、空仁がいうなりしこと  
をおもひいで、とぞ、このごろはむかしの心わすれたるら  
めども、うたはかはらずとぞうけたまはる、あやまりてむ  
かしにはおもひあがりてもや

語り手は「わざわざ言うほどのことでもないのだが、空仁が優であ

ったことを思い出したからだ」とこのやり取りを述べたことを弁解  
する。そして最近「昔の心」は忘れてしまったようだが、歌は変  
わらないと聞いていると言う。「心」は「道心」と解釈されている  
が、必ずしもそこに限定しなくてもよいように思われる。むしろ、  
「昔の心」を「昔親しくしていた頃の心」として、「この頃では昔の  
ような交誼がなくなり、私と歌や連歌を交わした時のことはもう忘  
れてしまったようだが、私とは歌を交わさなくなった今でも歌自体  
は変わらずに詠んでいると聞いている」の意に解せないだろうか。  
「あやまりて」も諸解釈があるが、「あやまりて」は「反対に」「逆  
に」といった意味であることが指摘されており、「<sup>8</sup>それどころか昔  
より歌は優れていると自負しているかもしれない」くらいの意味で  
あろう。いずれにせよ、西行と空仁の間柄が今はすっかり疎遠にな  
っているのは間違いない。かような言葉の背景に、昔の親交を無邪  
気に語ることでできない語り手の空仁に対する「この頃」の屈託、  
経験時とそれを語る現在の気持ちの落差を読み取ることは許されよ  
う。疎遠だからこそ記憶の中の空仁は一層美化される。そこに長々  
と空仁とのやりとりを述べてきた原動力があったと見たい。

## 二

次に掲げるのは常盤山荘に為業と西住、寂然、静空、寂超、西行  
が集まり、歌、連歌を詠み、物語をしたというもの。この中で、俗

名表記から見て為業は出家以前である。為業の名は保元三年（一一五八）頃まで記録類に見え、仁安元年（一一六六）『重家歌合』では寂念となっている。為業の出家は保元三年前後から仁安元年までのある時期であり、したがってこれは少なくとも仁安元年以前の出来事である。仮に仁安元年だとすれば西行は四十九歳である。

ためたゞがときはにためなり侍りけるに、西住・寂然まかりて、うづまさにこもりたりけるに、かくと申たりければまかりたりけり。ありあけと申す題をよみけるに

こよひこそ心のくまはしられぬれいらであけぬる月をながめて

(一三)

かくて静空・寂照（寂照）など侍りければ、ものがたり申しつつ連歌しけり。あきのことにてはだざむければ、寂然まできてせなかあはせてあて連歌にしけり

(一四)

おもふにもうしろあはせになりけり

うらがへりたる人のこゝろは

後世のものがたりをのく申けるに、人なみくにそのみちに

はいりながら、おもふやうならぬよし申て 静空

人まねのくまのまうでのわがみかな と申しけるに、

そりといはるゝなばかりはして

(一五)

あめのふりければひがさみのをきてまできたりけるを、か

うらんにかけてたりけるをみて 西住

ひがさきるみのありさまぞあはれなる

むごに人つけざりければけうなくおぼえて

あめしづくともなきぬばかりに

さてあけにければをのく山でらへかへりけるに、後会いつ

としらず と申す題寂然いだしてよみけるに

かへり行もとゞまる人もおもふらん又あふことのさだめなのよ

や

(一七)

一五番歌の詞書にもあるように、出家者ばかりの集まりということもあり、「物語」は勢い各自の信仰のあり方が中心となっていたらしい。為業はその中でただ一人在俗していたのであった。一三番歌の「心の隈」は心に影を落とす負の感情で、普段は心の奥底に秘められている。それが心を隅々まで照らす有明の月によって全て知れてしまったというのだが、それは互いの心を隔てていたものの内実をも照らし出すことにもなる。世俗の人に出家を勧める傾向があったという西行が、この日も為業に出家すべきだと訴えたことは想像に難くない。この「いらであけぬる」には、仏道に入る決心を付けることが出来ずに夜を明かしてしまったという含みが読み取れるのである。遁世者ばかりの集団の中で、為業の心だけが他者と隔てがある、上旬にはこのような揶揄があるのでないか。一七番歌では「かへり行く」人と「とどまる」人が対比される。為業が一人

「とどまる」場所はむろん常盤山荘であるが、各々が「かへり行く」先が「山寺」すなわち仏教施設であるのは実に象徴的で、「とどまる」は俗世と常盤山荘という二重の意味が読み取れる。

為業は『山家集』でも一人俗世に留まっている。

為業、常盤に堂供養しけるに、世を遁れて山寺に住侍ける  
親しき人々まうで来ると聞きて、言ひ遣はしける

いにしへに変わぬ君が姿こそ今日は常盤の形見成るらん

(山家集・七三四)

返し

色かへでひとり残れる常磐木はいつを待つとか人の見るらん

(山家集・七三五)

「いにしへにかはらぬ君が姿」と言いかける西行は、為業の堂供養を言祝ぐ体裁をとりつつも、親しい人がみな遁世している中で一人在俗している身への嫌味を感じさせる口吻である。西行の歌集に現れる為業は、常盤の山荘の主人であり、時に詠歌の場を提供したりはするものの『山家集』七九六、自身は俗世に留まり、一步引いた位置にいる。そこに西行は一言物中さずにはいられないのである。不思議と出家して以後の為業は西行の歌集中には現れてこない。

さて、一七番で夜明けと共に各々が山寺へ帰っていくというのだから、常盤山荘での集いはここで終わると読める。だが、全てを一晚の出来事と考えると、一三番歌で有明の月が輝いていたことがや

や不審である。一六番の連歌によれば、常盤山荘へは笠と蓑を身につけてやってきたといい、雨が降っていたようである。これでは月はいく見えまい。むろん、一三番歌「有明」は、当座とはいえ題詠であるから、現実とびつたり合っていないともよいかもしれない。しかし、歌会や歌合は季節などに即した題が設定されるのが普通である。しかも、この集まりは初めから詠歌を目的として開かれたのではなく、結果として歌の「場」となったものである。別れに際して「後会いつとしらず」の題が出されているように、即事性や即興性はかなり強いのである。いくら本来なら有明の月が美しい季節であるとはいえ、雨の降るの中、見えもしない有明の月を題に歌を詠むのは何ともちぐはぐな印象である。

常盤邸で有明の歌を詠む、雨の日に連歌を交わす、別れを惜しむ。これらは全て同日に起こったのかもしれないし、こうした雅会は一度ではなかったであろうから、別の日の出来事だったのかもしれない。しかし、それを穿鑿しても詮有るまい。この常盤山荘歌群が独り自在に在俗する為業とそれを咎めるが如き西行の視線を留めていることを重視したい。その時の空気や雰囲気や記憶が、同題の歌や連歌を次々と引き寄せ、結果的に一つの歌群を形成しているのではないか。それは謂わば記憶が記憶を呼ぶあり方である。次節では配列からこれを検討してみたい。

常盤山莊歌群に続くのは、寂然とともに大原の尾張の尾上なる人物を訪ねて物語をし、別れに際して名残を惜しんで連歌を詠み交わしたというもの（一八番）。西行はその後、ちょうどよい機会だからと人々と連れだつて良暹の旧跡を見に行く。

かく申て両ぜんが「まだすみがまもならはねば」と申けむ  
あと、かかるついでに見にまからんと申て、人々具してま  
かりて、をのくおもひのべてつまとにかきけるに

おほはらやまだすみがまもならはずといひけむ人をいまあらせ  
ばや  
(一九)

『山家集』重出歌である。この頃、歌人達は歌や歌人に纏わる名所旧跡を尋ね、そこで歌を詠むという行為を盛んに行っていた。一首の意は明快で、特に優れた歌とも思われぬが、価値は実際にそこへ行って詠歌をするところにあった。二〇番歌、二一番歌も同じく旧跡を訪問した歌で、修学院から小野殿を見に行った折の二首である。詞書は「人にぐして修学院にこもりたりけるに、小野殿見に入々まかりけるにぐしてまかりてみけり」から始まり、朽も果てた小野殿の現在の様子を語る文が続く。小野殿は惟喬親王旧宅で後に実頼が伝領した小野宮殿、小野郷にあつたとされる惟喬親王幽居跡などの可能性があつていまだ定説を見ないが、修学院の近隣である

ことを考えると、洛中の小野宮殿は相応しくないように思われる。

一九から二一番歌は名所旧跡を訪ねる一齣であるが、本来の目的は名所旧跡を訪ねることではない。別の用事で出かけた先で、こういう旧跡が近くにあると一座の人で盛り上がつて見に行くのである。状況としても非常によく似ているのだが、傍線部を付した如く、詞書の表現の一致、類似も気にかかる。一八番歌からの流れを簡単にまとめると、大原（一八）↓大原、旧跡（一九）↓小野、旧跡（二〇・二一）となる。加えて、一七番歌と一八番歌は「寂然」という共通人物で結ばれている。ここまで、あたかも一つの記憶が刺激となつて別の記憶を次々と呼び起こしていくように展開していくのである。

『残集』の掉尾の三首の配列も興味深い。

きたしらかはのもといゑの三位のもとに、行蓮法師にあひ  
にまかりたりけるに、心にかなはざるこひといふことを  
人々よみけるにまかりあひて

物おもひてむすぶたすきのおひめよわみほどけやすなる君なら  
な  
なく  
(三〇)

たゞもりの八条のいづみにて、高野の人々ほとけかきたて  
まつることの侍りけるにまかりて、月あかゝりけるに、い  
けにかはづのなきけるをきゝて

さよふけて月にかはづのこゑきけばみぎはもすゞしいけのうき

くさ (三二)

高野へまゐりけるに、かづらきの山にうじのたちたりけるを見て

さらに又そりはしわたすこ、ちしてをふさか、れるかづらきの

みね (三三)

三〇番歌から三一番歌は「北白川」から「八条の泉」へと詠歌の場が移動しているが、実は『山家集』に同様の配列が見られるのである。

八月、月のころ、よふけてきたしらかはへまかりけり、よしあるやうなる家の侍りけるに、ことのおとのしければ、たちとまりてききけり、をりあはれに秋風楽と申すがくなりけり、庭を見いれければ、あさちのつゆに月のやどれるけしきあはれなり、そひたるをぎの風身にしむらんとおぼえて、申しいれてとほりける

秋風のことにしむこよひかな月さへすめる庭のけしきに

(二〇四二)

いづみのぬしかくれて、あとつたへたりける人のもとにまかりて、いづみにむかひてふるきを思ふと云ふ事を、人々よみけるに

すむ人の心くまるるいづみかなむかしをいかにおもひいづらん

(二〇四三)

具体的な人名は明かされていないが、「泉の主」は「八条の泉」の主であった忠盛であると思われる。ここでも「北白川」から「泉」への展開を見せており、ただの偶然とは思われない。西行の中でこの二つを繋ぐ何らかの記憶があると想定したい。同様に、三一番歌と三二番歌を見ると、詞書には共に「高野」と見える。これも「高野の人々」から「高野へまゐる」途次が連想されたとは考えられないただろうか。これ以上の推測は今のところ難しく、ここではその可能性だけを指摘しておきたい。

『残集』の配列には語り手の連想が働いた痕跡が見て取れた。つまり、『残集』は回想する主体、すなわち西行が聞き手に問わず語りに、記憶の赴くままに過去の出来事を語っているという体の集なのである。「かくて」「具して」など同じ語が繰り返し使用されることに表れているように、それを語る言葉でさえ殆ど手を加えていないが如くである。むろん、それが西行自身の韜晦である可能性を否定するものではない。とは言え、先に触れた空仁歌群の後の「とぞ」という語り手が存在を誇示する文言を含め、『残集』の性格は如上のように理解しておくのが妥当であろう。

#### 四

前節までを踏まえて『残集』巻頭消息について考えてみたい。『聞書集』との関連において最も問題となってきたものであり、解



釈等も含めて様々な意見が出されてきた。

聞書集の奥に、これ書き具して、参らせよとて、人に申しつけて候へば、使のいそぎけるとて書きも具し候はざりけると聞き候ひて、人に書かせて参らせ候。必ず書き具して、申し候し人のもとへ伝へられ候べし。申し候し人と申し候は、北小路民部卿のことに候。そこより又ほかへもやまからんずらんと思ひ候へば、まからぬ先にとくと思ひ候。あなかしこ。兵衛殿のことなど書き具して候。あはれに候な。

時雨亭本では本文とは別筆で、かつて「定家様」と言われた書陵部五〇一・一七一本はこれの忠実な臨模体である。この筆跡が御物円位書状に似ていることを指摘されたのは久保田淳氏<sup>10)</sup>で、ここから差出人西行説が浮上し、巻頭消息の性格は根本から見直しを迫られたのである。確かに両者の筆跡には似たところがあり、また文中に四度も使われる「書き具」すが西行の歌集以外に殆ど見られない語であることも、この消息が西行の文章であることを想像させる。差出人西行説の蓋然性は高い。

次にこれが何の添状であったのか検討してみよう。本消息は現状では『残集』の巻頭に置かれてはいるものの、文中に「兵衛殿のことなど書き具して」とあり、『残集』には該当する箇所がないことから、本来は『聞書集』の最終増補に関わる書状であり、何らかの事情で『残集』の巻頭に混入したという説は根強い。だが、時雨亭

本の状態から想像するに、混入の可能性は極めて低い。時雨亭叢書の解題によると、綴葉装一帖で全二十丁、二括から成り、第一括、第二括ともに五枚の料紙を折ってこよりで綴じてあるという。影印で確認すると、第一括の一枚目の表部分（見返し部分の裏）に表紙を直接貼り付けてあるようである。この見返しから次丁の表にかけてが消息の書かれている位置にあたる。その裏には何も書かれず、次の丁から本文が始まっている。切り継ぎなどによる乱れはないと見え、本文の始まりを第一丁とすると、見返しと見開きになるのは八丁表、次頁は七丁裏と見開きになることになる。つまり、時雨亭本の消息文は二枚の料紙の右半分と左半分に書かれており、一枚の書状であったものが合綴されたのではなく、少なくとも料紙を組んだ状態<sup>11)</sup>で書かれたと理解せねばならない。時雨亭本において、消息の書かれた年代が本文のそれから大きく遡ることは決していないのである。時雨亭本の消息が西行真筆ならば、時雨亭本は原本と見なし得るから混入の可能性はないことになる。混入があるとすれば、時雨亭本以前、消息が一枚の書状の状態であった時期に限られる。が、その可能性も低いだろう。消息は散らし書きされているが、返し書の置き方を含め、字配りが一百ごとに完結していて、明らかに中央の位置が意識されている。こうなると、この消息が一枚の書状として『残集』・『聞書集』のいずれとも独立した状態であったことは果たしてあったのだろうかという疑念が生ずる。何より混入があった

場合に想定される複雑な状況が、定家手沢本たる時雨亭本以前にあったとはやはり考えにくい。筆跡が西行自身のそれであるかはまだ再考の余地は残されてはいるものの、消息文自体は、本来『残集』に付帯していた、西行の書状と見る説に従うのが最も妥当であろう。

「兵衛殿のことなど書き具して」は、『聞書集』に新たに兵衛歌群以降、すなわち現行『聞書集』における最終歌群を増補したことの意味する。その上で、やはりそれが『残集』の添状の中の文言であったとすると、そこから何を読み取る事が出来るだろうか。まず第一に、『聞書集』の最終増補の時期と『残集』の成立が近接し、そのために消息の宛先の人物が『聞書集』の最終増補分を見たのと『残集』を初めて見たのがほぼ同時であったという可能性である。こう考えれば、『聞書集』の文言が『残集』に含まれていることもさして不自然ではない。更に踏み込んだ憶測をすれば、『聞書集』の最終増補分と『残集』は同時に宛先の人物に送られたとも考えられる。『聞書集』の最終増補と『残集』の成立が近接していることを示す一例を『聞書集』から挙げよう。

五条三位の入道、そのかみおほ宮のいゝにすまれけるをり、  
寂然、西住などまかりあひて、後世の物語申けるついで  
に、向花念浄土と申ことをよみけるに

心をそやがてはちすにさかせつるいまみるる花のちるにたくへ  
て

(二四四)

かくてものがたり申つゝ、連歌しけるに、あふぎにさくらを  
きてさしやりたりけるを見て 家主頭広

あつさゆみはるのまとゐに花ぞ見る (二四五)

とりわきつくべきよしありければ

やさしきことになほひかれつゝ、

傍線を付した箇所特に顕著なように、先述した『残集』常盤山  
荘歌群と非常によく似ている。寂然、西住といった人物もおなじみ  
であり、後世の物語などをしつつ連歌をするという状況も同じであ  
る。時期的な点に着目すれば、俊成の頭広時代、すなわち仁安二年  
(一一六七)の改名以前、そして久寿年間以前と言われる寂然の出家  
以後の出来事であり、その幅は最大十年ほどあるものの、『残集』  
の常盤での一齣と大まかには一致する。いずれも西行四十歳から五  
十歳以前のことである。こうした類似は、『残集』と『聞書集』の  
最末部が非常に近接した時期の成立であることを推測させるには十  
分であろう。「兵衛殿のこと」が『残集』巻頭の消息文にあること  
からまず単純に想像できるのは、以上のような享受の事情である。

次に考えられるのは、「兵衛殿のこと」が『残集』の成立に何ら  
かの関わりがあるのではないかということである。『聞書集』の最  
末尾には若い時期の詠作、長い詞書を持つ日常で詠まれた歌が集中  
して見られ、『残集』との連続性も見出すことができるが、それは  
具体的には上西門院兵衛歌群以降にあたる。『聞書集』が懐旧の色

彩を帯び、殆ど間を置かずに『残集』へと引き継がれるのである。

西行を懐旧へと向かわせたもの、それは上西門院兵衛の死であったのではないだろうか。上西門院兵衛歌群を実際に見てみよう。

上西門院にてわかき殿上の人々、兵衛のつぼねにあひ申して、武者のことにまぎれてうたおもひいづる人なしとて、月のころうたよみ連歌つゞけなむどせられけるに、武者のこといできたりけるつゞきの連歌に

いくさをてらすゆみはりの月

(聞書集・二二八)

伊せに人のまうできて、かゝる連歌こそ兵衛殿のつぼねせられたりしか、いひすさみてつくる人なかりきとかたりけるをきゝて

心きるてなるこほりのかけのみか

申べくもなきことなれども、いくさをりのつゞきなればとてかく申ほども、兵衛のつぼね、武者のをりふしうせられにけり、ちぎりたまひしことありしものをと、あはれに

おぼえて

さきだ、ぼしるべせよとそちぎりしにおくれておもふあとのあはれさ

(聞書集・二二九)

仏舍利おはします、「我さきだ、ばむかへたてまつれとちぎられけり

なきあとのをもきかたみにわかちをきしなごりのすゑを又つた

へけり

(聞書集・三三〇)

西行は伊勢で上西門院兵衛の連歌の噂を聞く。折しも時は源平争乱のまった中であった。西行はこの動乱のさなかを伊勢で過ごしていたらしい。兵衛の死を知った西行はかつて兵衛と約束したことを思い出し、二百の歌を詠むのである。兵衛の死をきっかけに、在りし日の兵衛とのことに思いを馳せていることに注目したい。何か衝撃的なこと、印象に強いことが起こった時、それに纏わる過去に思いを馳せるのは自然な成り行きであろう。そこから派生して様々な記憶が胸の中に来るものもまたあり得ることである。『聞書集』が末尾になって特に懐旧的傾向を見せる背景にこうした西行の心の動きを読み取りたい。

自らと同じ時代を生きた人の死を契機に、自分に残された日数を思う。その時、自分が記録しなければ埋もれてしまう数々の出来事や既存の家集から漏れている題詠歌や日常詠草をも残しておきたいという欲求が生まれる。それは、謂わば思い出を綴るような行為であり、『残集』に懐旧的情調が認められる所以である。『残集』巻頭消息に「あはれに候な」と付言せずにはいられないほど西行の心に深い感慨を呼び起こした兵衛の死は、そうした欲求を生む契機、『聞書集』から『残集』への転機になったのではないだろうか。

『聞書集』は武者の歌、源平争乱に纏わる、いわば現在の歌から兵衛の死を経て過去に目をむけ始めた。しかし最後は源通親が伊勢

へ勅使として下った折（寿永二年か）の歌群である。最終増補歌群は伊勢で成ったと言われているが、そのせいか伊勢での詠歌が大半を占める。そして『残集』は「奈良のこうよ法眼」のもとで詠まれた「立春」から始まる。これは『残集』が独立した家集として編纂されたことを意味するものに他ならない。『聞書集』が伊勢での詠歌で閉じられた時、西行の中で再び思い出された過去の詠草を集めた『残集』というもう一つの家集を編むことは決定されていたのである。

最後に、この消息の解釈で問題となっている点についていくつか触れておきたい。まず「北小路民部卿」の人物比定について、「北小路民部卿」は、「民部卿」であつた平親範、藤原資長、藤原成範の中で、文学的見地や西行との交際から藤原成範が最有力視されているが、いづれも「北小路」との関連が見出しがたい点に問題がある。この中で親範に注目したい。資長は和歌事跡が殆ど見出せないが、親範は勅撰集にも入集を果たしている。親範は承安四年（一一七四）病のために出家し、大原に隠棲した。『粟田口別当入道集』には大原での歌会での歌が残されている。

入道民部卿親範卿、すぎぬる夏より、よをすててこのやまにすみて、こよひこの中にまじりてよめり、ことがらなにとなくあはれにて、その歌もかけり

みやこにておくりむかふといそぎしをことしはよそにおもひこ

そやれ

（九九）

この歌が後に『千載集』に採られるのだが、ここからは大原で遁世者達が折に触れて集っていたこと、親範がそれに参加したことが知られるのである。大原と言えば、寂然が隠棲した場所でもあり、『残集』に大原を舞台としたやりとりが収められていることは先に見た通りである。恐らく西行もこうした歌会に参加したことがあつたであろう。若き日の雅交を振り返る『残集』が、そこに集つた人々、いわばその思い出を共有する人を読者として想定して見た見るのは不自然ではあるまい。むしろ事實は逆かも知れない。『残集』を編む目的の一つに、彼らに見てもらふことがあつたとも考えられないだろうか。「北小路民部卿」は「申し候し人」と紹介されるが、これは北小路民部卿が見たいと申し出ていたと解釈されている。見たいと言っていたのが『聞書集』なのか、『残集』なのか、ただ西行の新たな家集ということなのかはわからない。消息の立場は『残集』成立直後、すなわち『聞書集』最終成立直後である。読者の存在、それは家集編纂の動機の一つと成り得たであろう。ここは西行が見せたいと宛先の人物に前から申し出ていたとも読めるが、導かれる結論は変わらない。ここで「北小路民部卿」が「親範」である可能性を指摘しておきたい。

また「そこよりまたほかへもやまからんずらん」の解釈であるが、これは北小路民部卿の所から今回の増補部分を含まない西行の家集

が流出するの意であるとされている。しかし、消息の時点で北小路民部卿が家集を持っていて、その流出より前に増補部分を書き加えたい、と思うのならば、北小路民部卿に直接頼むのが自然であり、増補を急いでいることと宛所というワンクッションを置くことは明らかに矛盾する。北小路民部卿はまだ増補以前の形の集も持っていないと考えられる。「まかる」は他者の行為でも使用されることもあり、無理に西行の側の行為としなくても、北小路民部卿その人が「まかる」と見ればよいのではないか。北小路民部卿が、どこかわからないが「そこ」より「まか」るのではないかと思つた西行が、その前にこの『残集』を届けて欲しい、と依頼する。この一文はこう解釈することも出来るのではないかと思う。

消息は文も短く、受け手だけを意識したものであるから様々な解釈の可能性が生じ、いずれとも決定するのが難しい。推測に推測を重ねることになってしまったが、『聞書集』や『残集』の内容や現存本の状態を鑑みて、以上のように解釈しておきたいと思う。

『残集』は『聞書集』を承けた集でありながら、藤平氏の指摘の如くその内容には差異が認められる。だがそれは両集の連続性と相反するものではなかった。『聞書集』を編むという行為を通じて生まれた懐旧への傾斜が『残集』という小さな歌集として結実したのである。この後、西行は自詠を撰歌する方向で歌をまとめ、新作家集を編むことは行わなかった。その意味で最後の家集となつた『残

集』は、既存の家集には洩れた歌を集めた集であり、文字通りの「残」集なのだが、それらを纏めようと思ひ立つには、『聞書集』というプロセスが不可欠であつたのである。

(1) 「考証三編」(『新古今とその前後』笠間書院、一九八三年)

(2) 「西行『聞書集』の成立」(『和歌文学研究』八七号、二〇〇三年一月)

(3) 寺沢行忠『西行集の校本と研究』(笠間書院、二〇〇五年)では、直接の書写関係はなく、転写を経ているとしている。

(4) 但し、適宜濁点、読点などを付した。

(5) 天理図書館蔵『聞書集』は「寂蓮筆」という極めが付されている。

(6) 久保田淳氏は原本が極めて原本に近いものである可能性を指摘している(『草庵と旅路に歌う 西行』、新典社、一九九六年)。

(7) この歌群に触れたものとして、金任仲「西行の出家―空仁との関わりをめぐって―」(『明治大学大学院文学研究論集』一五号、二〇〇一年九月)、柴佳世乃「西行と法輪寺―道命との関連において―」(『国文』

八二号、一九九五年一月)、久保田淳「空になる心」(久保田淳著作撰集第一集『西行』、岩波書店、二〇〇四年)などがある。

(8) 山本一「副詞としての「あやまりて」―中世文学の用例から―」(『北陸古典研究』七号、一九九二年九月)、山田みどり「用法の違いと意味

の差と―「あやまりて」を例として―」（『同朋回文』二二号、一九九〇年三月）など。

(9) 『古今著聞集』卷一五、四九四話では公衡に、『山家集』七三〇、七三二番歌ではそれぞれ成通、公能に出家を勧めている。西行の知り合いに出家を勧める傾向と『山家集』七三四番歌に感じられる俗体の為業への皮肉については注(6)に言及がある。だとすると、ここでは三組の出家を勧める贈答歌が配列されていることになる。

(10) 注(6)に同じ。

(11) 「春、しなののくにへまかる人のありしを」（『粟田口别当入道集』二二三）、「上西門院の女房、法勝寺へ花見にまかるとききて」（『寂然法師集』八一）など。